

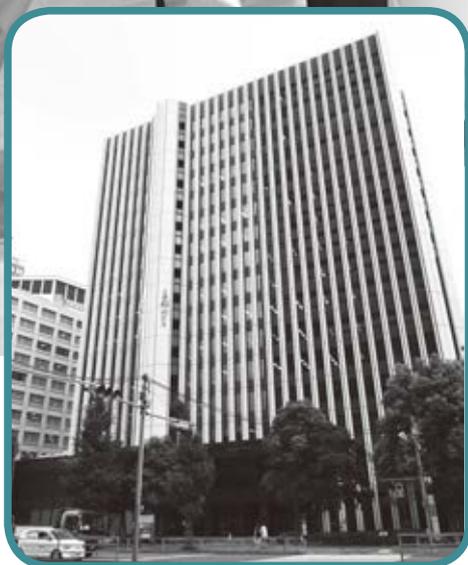
パッケージ組立てから 3Dプリンター操作まで

—株式会社バンダイナムコウィル(東京都)—

職場
ポ



(文) 豊浦美紀 (写真) 小山博孝・宮野貴



取材先データ

株式会社バンダイナムコウィル

〒108-0073 東京都港区三田3-13-16 三田43MTビル15F
TEL 03-6891-2241 FAX 03-6891-2242

Keyword: 特例子会社、就労移行支援事業、障害者職業生活指導員、ジョブコーチ、3Dプリンター、テレワーク

POINT

- ① グループ会社への地道な営業活動で、25種類以上の業務を受託
- ② 一人ひとりの特性や長所・短所を活かした適材適所で、業務拡大
- ③ 障害者職業生活相談員を配置し、一人ひとりを見守る体制
- ④ 地方拠点での雇用や異業種との連携、テレワークが今後の課題

テーマパークの舞台裏で

東京都・池袋のサンシャインシティ。その一角にある屋内型テーマパーク「ナンジャタウン」は、テレビアニメや漫画のキャラクターにちなんだイベントやアトラクションが人気で、休日ともなれば朝から大勢の家族連れや若者でにぎわう。

お祭りのような雰囲気の内フロアと壁一枚挟んだ舞台裏は、通路のあちこちに小道具などが置かれ、パフォーマーをはじめ多くの従業員が忙しく動き回っている。

そんなバックヤードの一室で、おそろいの綿シャツを着た4人がテーブルで作業をしていた。取材陣に気づくと一斉に顔を上げ「こんにちは」と元気な声で挨拶



東京池袋のサンシャインシティ内にある
テーマパーク「ナンジャタウン」



バンダイナムコアミュージメント・
テーマパーク営業部の源島めぐみさん

拶してくれた。彼らは、大手エンターテインメント企業「株式会社バンダイナムコホールディングス」の特例子会社「株式会社バンダイナムコウィル」のスタッフ（※2）たちだ。

ここでは主に、チラシなどの折り作業や景品の袋詰め・加工、販売グッズの検品・清掃などを行っている。業務を委託している「株式会社バンダイナムコアミュージメント」テーマパーク営業部の源島めぐみさんが話す。

「これまで仕事の合間にやっていた作業をお願いすることで、本来の業務である接客やパフォーマンス披露などに時間をかけられるようになりました。今月からは園内にも入ってもらい、イベント中の小道具の仕込み作業という新しい仕事もお願いする予定です」

スタッフの金山達志さん（25歳）に少し手を休めてもらって話を聞いた。金山さんが担当しているのは、ナンジャタウンの業務以外にも、新商品のパッケージサンプルや販促用玩具の製作、各店舗



ナンジャタウンで働く金山達志さん（右）たち

に配達するDVDの仕分け作業などだ。「もともと手先を使う作業が好きです。趣味で絵を描いたりプラモデルをつくっているのですが、自分に合っていると思います」と話す。最近ではパソコンを使い、ゲームアプリの動作チェック作業なども行っている。

「会社の知的財産権にかかわるような大事な仕事を任せてもらっていることに、やりがいを感じています。周りの人がみんな明るくて、気持ちがいいですね」

清掃からスタート、 10年かけ25業務以上に

バンダイナムコウィルは、玩具メーカーのバンダイとゲーム制作会社のナムコが統合した翌年の2006（平成18）年に誕生した。現在、社員92人のうち知的障

※1：本誌では通常「障害」と表記しますが、株式会社バンダイナムコウィル様の要望により「障がい」としています
※2：株式会社バンダイナムコウィルでは障がいのある社員を「スタッフ」と呼んでいます



事業支援チームマネージャーの田中康生さん

がいて54人、精神障がい者5人、身体障がい者6人が働いている。

事業所は東京都内に4カ所と栃木県に2カ所の6カ所だが、請け負う内容によって別会社で業務をすることもある。グループ会社10社以上から6分野25種類以上ものぼる業務を受託しているという。

事業支援チームの田中康生さんは、「グループ会社も業務も数多くて恵まれています。ここまですべて拡大するのに10年近くかかりました」と振り返る。

「清掃業務からのスタートでしたが、ほかの業務を加えるまでに5年ほどかかりました。各グループ会社に向いて説明をする際に、『特例子会社が何のために存在するのか』というところから理解してもらわなければいけませんでした」

あるとき、社内ですべて棚上げにされていたデータ移行の入力作業にトライさせてもらったところ、期待以上の評価を得られた。その後も、社員が残業で行っていた事務作業を探し出し、営業活動を続けながら実績を積み重ねた。3年ぐらいい前から「これもできる？」というグループ会社からの提案が急速に増えたという。

一方で、スタッフの働きやすい環境を整える努力も欠かせない。職場には4、5人に1人の割合で障害者職業生活相談員の資格を持つ支援員を置き、一人ひとりの様子を細やかに見守り、指導する体制をとっている。支援員には60代の高齢者もいて、前職のキャリアを活かす人が

いる一方、別業種から転職してきた人もいる。

経営管理部ゼネラルマネージャーの藤沢聖子さんが支援員について説明してくれた。

「これまで障がい者と接した経験のない方でも、入社後に研修を受けてもらいますので、基本的には人柄を見て採用させていただいています。職場の昼休みに、みんなでカードゲームを楽しんだり家族的な雰囲気です。あるときはピシッと叱り、あるときはプライベートな悩みごとにも聞いてくれるような、大事な存在になっていくようです」

これまでは地域障害者職業センターから定期的に職場適応援助者（ジョブコーチ）を派遣してもらっていたが、今年から社員2人が企業に籍型ジョブコーチになったことで、日ごろからスタッフの様子を把握しやすくなったという。仕事上のアドバイスをしたり、調子が悪そうなときに精神的なサポートを行ったりしている。

「スタッフのみなさんに『自分のことをちゃんと見てくれている』ということが伝わるためか、変化が見えるケースも増えていきます」

ある女性スタッフは、自分の身なりをあまり気にせず、寝ぐせのついた髪で出社してくることが多かった。そこで「みだしなみは大事だよ」とアドバイスすると、休み時間にブラシで髪をとかしたり

服装に気をつけるようになり、仕事ぶりもよくなったという。

バンダイナムコウイールは2015年から、宇都宮で就労移行支援事業所「みらいステーション」も運営している。ここからバンダイナムコグループへの就職者はまだ3人だが、働きたい人を支援する側と、雇用する企業側、両方の立場から障がい者雇用について深く理解できることが強みだという。「就労移行支援事業所には、さまざまな方がいらついています。障がい種別で一括りにできることはなく、一人ひとりの個性や長所・短所に合わせた職場環境をつくり、持てる力を引き出すことが大事だと実感しています」と藤沢さん。

「私たち特例子会社は、グループ会社での直接雇用につなげることを目指しています。『みらいステーション』でつちかっただノウハウや改善例を伝えることで、ほかのグループ会社においても障がい者のみなさんが働けるよう環境づくりに活かしていきたいと強く思っています」

特定分野で秀でた能力も発揮

スタッフの活動拠点がある港区の三田本社も訪れた。ビルの15階フロアでは30人ほどのスタッフがテーブルに座って熱心に作業をしている。よく見ると、ステンドグラスのような半透明の蝶の羽をつけていた。小学生以上向けの工作キッ

WORKSHOP REPORT

手際よくカッターを使って作業する
大下一太郎さん



工作キットの試作品づくり。
売場の展示見本となる

トの試作品で、全国各地の玩具売り場などで見本用に展示してもらおうとすのだ。

指示通りの試作品を納期までに揃えてくれるという評判が伝わり、注文がどんどん増えている。以前、発売前のペーパーラフトの試作を依頼された際は、みんなで話し合いながらつくり上げたという。

少し離れた別のテーブルでは、1人黙々とカッターで紙を切っているスタッフがいた。大下一太郎さん（27歳）だ。つくっていたのはお菓子などの商品のパッケージサンプル。余白部分を切り落とし、手際よく折って、のりづけして組み立てる。大下さんは「キャリア8年です。手先を使う仕事が好きなので、集中力が切れません」と、手を休めずに答えてくれた。

特定の分野で秀でた能力を発揮しているスタッフは、ほかにもいる。聞いた言葉が得意なスタッフは、DVDの台詞起こし作業を任されている。またプラモデル制作が得意で、売り場展示用や品質検査用の作品を「このスタッフにつくってほし

い」と指名されているスタッフもいる。現場のまとめ役をつとめる事業支援チームの正岡哲さんに話を聞いた。

「ここにはスタッフが30人います。彼らの輪のなかに入って会話を重ねながら特性や性格、得手不得手などを見極めて『この人にはどんな仕事に向いているのだろう』と考えます。もちろん、最初からうまくいくケースばかりではありません。あるスタッフは入社後の職場環境になじめず小さなトラブルもありましたが、違う業務に変えてみたら見違えるようになり、善し、仕事にも自信を持てるようになったようです。とにかく一人ひとり、よく見ることが大切だと思っています」

現場では、だいたい1週間先までの業務内容とシフトを組み合わせて予定を組んでいる。委託元からの信頼も厚く、スタッフは事業所や倉庫などを毎日行き来するほどの忙しさだが、常に心がけているのは「安全第一」だ。電車を使ったり、場所によっては駅から歩いたため、天候が荒れそうな日には、作業が残っていても



事業支援チームの正岡哲さん

早退させてもらえるように、正岡さんから委託元に要望している。

パラリンピック目指す選手、みんなまでフォロー

三田本社の道路向かい側にある親会社の「バンダイナムコ未来研究所」ビル内にも事業所がある。ここではグループ会社内のメール便や郵便・宅配物の集荷・仕分け、外部への発送業務などを行っている。「○○の作業が終了しました」、「了解です」などと各担当が声に出して作業報告をし、周囲が呼応しながら確認していた。スピーディーに動き回っている様子が印象的だ。

奥のデスク席で、はがき片手にパソコンを見つめる倉本翼さん（21歳）に、何をしているのか聞いたところ「外部からの郵便物を社員に間違えずに届けるために、どの部署に在籍しているかを確認しています」と説明してくれた。社内の人から問合せや依頼の電話も受ける。そのよう



メール室で働く倉本翼さん。
パラ陸上競技選手として活躍している



パソコンで入力し、3Dプリンターを操作する



3Dプリンターを担当する桜井玲さん

職場 ルポ

な際は聞き漏らしがないようメモを取り、わからないことはすぐに同室にいる支援員に相談しているそうだ。

実は倉本さんは、パラ陸上競技の選手。中学時代から始め、2016年には日本

知的障がい者陸上競技連盟が公認する400m日本記録を更新した。ところが先月、別の選手に記録を更新されてしまったという。「近く行われる大会で、必ず抜き返したいです」と倉本さん。

練習は、休日の土日はもちろん、水曜日・木曜日も15時半で職場を早退して、千葉県の市川市や松戸市などで行っている。早退する際は、ほか



ピースができあがる



できあがったピースを取り出す



竹串やブラシを使ってパーツを仕上げる



のスタッフが業務のフォローに回ってくれている。

「私の分まで仕事をしてくれている仲間たちのためにも、記録を伸ばし、2020年のパラリンピックに必ず出場したいです。みんなに『がんばれ』と応援してもらっているのがうれしいです」

バンダイナムコウイールでは年に一度、アピリンピックやパラスポーツに出場したスタッフ、彼らの練習に合わせて業務のフォローに回ったスタッフら一人ひとりを表彰している。

3Dプリンターで 高度なパソコン操作も

バンダイナムコウイールが現在受託している業務のなかで、最も高度な技術を含

んでいるのが「3Dプリンターによる玩具の試作品の造形補助」だ。作業が行われている台東区駒形のビル内事業所を訪ねた。

テーブルを囲んでスタッフ8人と指導員が座り、竹串やブラシを手に半透明の黄色い物体から何かをこそぎ落としていく。この物体が、3Dプリンターで制作された試作品パーツだそう。

触らせてもらうと、消しゴムのような柔らかい部分と、プラスチックのような硬い部分がある。この柔らかい部分(サポート)だけをこそぎ落としていくと、最後には硬い部分だけが残り、きれいな完成パーツになる。まるで化石や遺跡品の発掘作業をしているようにも見える。

指導役をつとめる川股伸也かわまたしんやさんによると、この作業の大きな注意点は、サポートに埋まった小さな突起などを、ポキッと折ってしまったまわらないように気をつけることだという。

「私自身も含め、全員が必ず失敗を経験します。口で説明するより、手の感覚で加減を直接身につけていくしかありません。あせらずじっくり取り組める人に向いているかもしれません」

慣れた手つきで作業していた桜井玲さくらいりょうさん(19歳)は、入社2年目。1年目はやはり何度か折ってしまったそうだが、「いまはパーツの形によって、どのあたりに突起が埋まっているかわかるようになりました」。特別支援学校時代からアニメやゲー



桜井さんたちの指導にあたる川股伸也さん（上）

現場は、すぐ近くの別ビル内にある。巨大な3Dプリンターが2台。ほぼ24時間フル稼働で、1回あたり数時間から10時間以上もかかるパーツの造形を行っている。

ムが好きだと先生に話していたところ「いい会社があるよ」と紹介され、実習を受けて採用された。横浜方面から片道1時間半の電車通勤だが、「この会社で働けること自体うれしいですし、職場のみなさんも優しく、毎日楽しく仕事をさせてもらっているなあと感じます」と笑顔で話す。

パーツをつくり出している

バンダイから送られてきた大量のパーツデータを、パソコン上で枠内に入れ込むのが、最も高度な作業だ。現在は3人のスタッフがこの3Dプリンター操作を行うことができる。川股さんは「空間認識能力を働かせてパーツの組合せを考えなければならず、私は習得するまで1年かかりました」と打ち明けるが、桜井さ



3Dプリンターの作業を一人でするまでに成長した伊藤大樹さん



事業推進部マネージャーの國吉由香さん

地方拠点での雇用やテレワークも視野に

んは数カ月でマスターしたという。さらに伊藤大樹さん（23歳）は、データ入力からでき上がったパーツの取り出し作業までを一人で任されている。「5カ月ぐらいで習得しました。パーツの向きや裏表を変えながら効率的に造形できるように調整するのはたいへんですが、やりがいがあります」と頼もしい言葉。

玩具試作品の造形補助は8年前から始まったが、当初は、バンダイ社員がこそぎ落とした残りがすを集めて掃除する作業だけだった。そのうち現場で「やってみる？」といわれ、挑戦してみると予想以上の仕上がり。少しずつむずかしいパーツなども手がけるようになり、いまではスタッフだけで作業を完結できるようになったのだという。

バンダイナムコウィルでは今年度、業務と採用人数の拡大をすすめるために新たな3カ年計画を立てた。事業推進部でマネージャーを務める國吉由香さんに話

を聞いた。

「障害者法定雇用率が2・2%に引き上げられ、今後も段階的に上がっていく見通しのなかで、現状の仕事の幅を広げる以外の新しい試みも必要ではないかという考えが背景にあります。組織は立ち上がったばかりですが、大きく三つの柱で具体的に検討していく予定です」

一つめは「地方拠点での雇用」。地方展開しているアミューズメント施設での現地採用を進められるような体制づくりだ。これまでも宇都宮市などで実績はあるが、さらに本格的な事業として、大阪で準備をすすめている。地元の就労移行支援事業所と相談しながら採用スケジュールを立てている最中だ。

二つめは「異業種との連携」。異業種の分野も視野に入れながら、障がい者向けの仕事をつくり出していけないか模索中だという。

三つめは「テレワークの推進」。現在、身体障がいのあるスタッフに週2日の在宅勤務を試験的に行ってもらっている。テレワークで可能な業務を、どこまで増やせるかも検討中だ。

「さまざまな事情で通勤が困難な人も働きやすい環境を整えることと、テレワークのための業務を創出することで、新たに専業で活躍できる人材を全国から広く採用していきたいと考えています」大企業ならではの組織力を活かして、ぜひ新たな成功事例をつくってもらいたい。